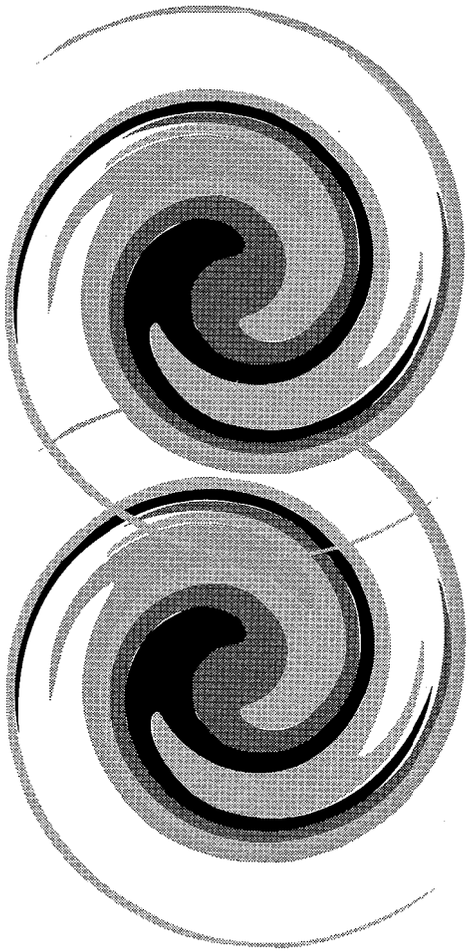
各論



第1章

頭部と顔面部の痛み

頭部は脳（中枢神経）の局在場所である。ここに外邪である六淫（風・寒・暑・湿・燥・火）の侵入，過激な七情（喜・怒・憂・思・悲・恐・驚），外傷，過労，飲食の不摂生などの状態が生じると，脳，頭部，顔面の気血の運行が阻害され，瘀血の病態が生じてさまざまな形で痛みが現われる。瘀血の病態は痛みの主な原因であり，血液循環障害と痛みは深い関係がある。本章では頭部と顔面部における痛みについて中医学の考え方や弁証論治，治療経験，漢方エキス剤の使い方を紹介する。

第1節　頭　痛

1　概　説

頭痛とは，頭部の片側，両側，頭頂部，後頭部などに現われる痛みのことであり，病名ではなく，臨床でよくみられる症状のひとつである。

現代医学では片頭痛，緊張型頭痛，群発頭痛，頭部外傷にともなう頭痛，脳血管障害にともなう頭痛，非血管性頭蓋内疾患にともなう頭痛，代謝疾患にともなう頭痛，感染症にともなう頭痛などに分類している。頭痛に対する治療は，対症療法として鎮痛剤や鎮静剤などを投与しているのが現状である。

中医学では頭痛を外感頭痛，内傷頭痛，頭風，真頭痛などに分ける。外感頭痛はインフルエンザやかぜなどの外感病の１つの証候であり，発病は急で経過は短く外感病の症状をともない外感病が治れば頭痛も治まる。内傷頭痛は五臓六腑の病気によって引きおこされるものであり，慢性的な経過をたどり，治療では頭痛を治療するだけでなく，臓腑の機能や陰陽のバランスなどを調整しなければならない。頭風は発作性の頭痛で頭痛がおこったり止まったりし，自然の風のように変りやすい特徴を持ついわゆる片頭痛であり，精神的なストレスに関わることが多い。また真頭痛は頭蓋内の器質的病変（脳腫瘍など）による頭痛を指す。

風，寒，熱，湿，気虚，血虚，腎虚，肝火，痰濁，瘀血などが原因で，頭部の気血の流れ

が阻害されるため，いわゆる「不通則痛」（通ぜざればすなわち痛む）で頭痛を引きおこす。具体的には，外感の風，寒，熱，湿などの邪気，血液循環が悪くなって生じた瘀血，水分代謝の障害によって生じた痰湿，いらいらや怒りなどの感情の変化によって生じた肝火などにより，頭部血管の収縮や拡張機能が乱れ，気血の運行が悪くなるため頭痛が現われる。

風邪が頭痛をおこした場合には，痛みがおこったり止まったり移動したりして変化しやすい。寒邪が頭痛をおこしたときは，頭に触れると冷たい，あるいは冷えると痛みが増強し温めると軽減するという特徴がある。湿邪が頭痛をおこしたときは，頭が重くて痛く頭部が包みこまれたように感じる特徴がある。また気虚による頭痛は痛みの程度は軽いが，連続してじくじく痛むものが多く，倦怠感，脱力感，食欲不振などの症状をともなう。さらに血虚による頭痛は隠痛が多く，貧血，顔色が悪い，めまい，動悸，不眠などの症状をともない，腎虚による頭痛は頭頂部の痛みとして現われることが多く，腰や下肢の疲れや脱力感，排尿異常などの症状をともなう特徴がある。瘀血による頭痛は頭部外傷の病歴があることが多く，刺すように痛むという特徴がある。

現代中医学では，頭痛の弁証論治に際して西洋医学の診断や臨床検査のデータを参考にする。すなわち西洋医学の診断にもとづいて，頭痛を引きおこす原因や全身のバランス状態を判断し，いくつかのタイプに分けて適当な処方を投与する。非器質性疾患にともなう頭痛に対しては，鎮痛の効果が得られるだけでなく，全身の機能や陰陽バランスなどを調整する効果も期待でき，さらに頭痛が完治することも少なくない。激しい頭痛に対して中薬や漢方エキス剤の効果がすぐ現われない場合には，西洋薬の鎮痛剤を用いてもよい。両方の治療は中薬あるいは西洋薬を単独で用いるより両者の優れた点を合わせることによって，さらによい効果が得られる可能性がある。

頭痛は内科，外科，精神神経科，眼科，耳鼻咽喉科，歯科などの疾患によくみられるが，真頭痛（脳腫瘍など）を除いて，いずれの分野の頭痛に対しても中医学の弁証論治を用いて治療することができる。

2　弁証論治

頭痛は外感頭痛と内傷頭痛に分ける。一般的には，外感頭痛では実証が多くみられ，内傷頭痛では虚証もあるし実証もあり，あるいは虚証と実証と混在することもある。治療では，外感頭痛に対しては外邪（風，寒，熱，湿など）の違いにより去風，散寒，清熱，除湿などの生薬を用いるのが主流である。内傷頭痛に対しては臓腑の病態により治療法が異なるが，治療原則としては補虚，瀉実，止痛の生薬を用いることが多い。また，外邪が侵入した経絡や臓腑の違いにより生薬の配合を工夫する。たとえば，太陽経の頭痛には羌活，麻黄を，陽明経の頭痛には葛根，白芷を，少陽経の頭痛には柴胡，黄芩を，厥陰経の頭痛には呉茱萸，藁本を配合して用いるとよい治療効果が得られる。そのほかに針，マッサージ，食事療法などを併用する。

◈ 外感頭痛 ◈

1．風寒頭痛型

風寒邪は体に侵入すると頭部の気血の流れを塞ぐため頭痛を引きおこす。臨床ではかぜやインフルエンザなどによる頭痛，寒冷により誘発される神経性頭痛，片頭痛，血管性頭痛などに見られる。

【主証】突発性の頭痛，痛みは激しく頸項部につながり，寒冷により痛みが強くなり，温めると軽減する。悪寒，悪風，発熱，鼻づまりなどをともなう。舌質は淡白，舌苔は薄白，脈は浮弦あるいは浮緊。

【治則】去風散寒，止痛

【方薬】川芎茶調散『和剤局方』

川芎６ｇ，荊芥４ｇ，薄荷４ｇ，白芷４ｇ，防風４ｇ，羌活４ｇ，香附子６ｇ，茶葉３ｇ，甘草３ｇ

【加減】激しい頭痛で治りにくい者には全蝎３ｇ，僵蚕３ｇを加える。

【エキス剤】川芎茶調散を用いる。かぜの初期で悪寒，身体痛，後頭部の痛みをともなう場合には葛根湯を投与する。

2．風熱頭痛型

風熱邪は頭部に侵入しやすいので，しばしば発熱や熱感をともなう頭痛を引きおこす。臨床では発熱や暑さにより誘発された各種の頭痛に見られる。

【主証】頭痛，痛みは熱っぽく脹った感じ，発熱や熱さにより痛みが強くなり，冷やすと軽減する。発熱，口渇，咽喉痛，目の充血，便秘などをともなう。舌質は紅，舌苔は黄，脈は浮数。

【治則】去風清熱，止痛

【方薬】芎芷石膏湯『医宗金鑑』

川芎５ｇ，白芷５ｇ，羌活５ｇ，石膏10ｇ，菊花６ｇ，藁本４ｇ

【加減】頭痛の激しい者には全蝎４ｇ，細辛１ｇを加える。発熱がひどく，頭痛が軽い者には桑菊飲加減（桑葉８ｇ，菊花３ｇ，薄荷３ｇ，杏仁６ｇ，桔梗６ｇ，芦根６ｇ，連翹５ｇ，甘草３ｇ，黄芩５ｇ，山梔子６ｇ）を用いる。

【エキス剤】上記の方剤はエキス剤にはない。頭痛，顔が赤い，にきびのような皮膚化膿症をともなう頭痛には清上防風湯を，慢性鼻炎や蓄膿症などをともなう風熱頭痛には荊芥連翹湯を投与する。

3．風湿頭痛型

風湿邪は粘着の性質があり，頭に集っている清陽の気を包みこむと，頭が重く締めつけられたような痛みを引きおこす。臨床では浮腫やむくみなどをともなう頭痛に見られる。

【主証】頭痛，頭重（頭部が包みこまれたような感じ），胸部の煩悶感，食欲不振，四肢と